
 目次

導入	3
目次	5
第一章：テキストの性質	9
1.1 テキストの性質	9
1.2 単語の最後の文字と次の単語の最初の文字の相関	10
1.3 単語の最初の文字	11
1.4 行頭の単語の最初の文字	12
1.5 行が機能単位	12
1.6 クーリエの論文(1976)の主張	13
1.7 ヴォイニッチアルファベット	15
1.8 筆記者 A と筆記者 B	17
1.9 ヴォイニッチ文字についての考察	18
1.10 修正の痕跡	20
1.11 本文中の数字	20
1.12 本文中の通常の文字	21
第二章：繰り返しから解読の可能性を探る	23
2.1 惑星	23
2.2 プレアデス星団	25
2.3 ラベルテキストの繰り返し	25
2.4 繰り返しはでたらめの証拠？	27
2.5 ラベルは名前ではなく特性を表す？	28
2.6 十二宮のラベルの繰り返し	28
第三章：言語 A と言語 B	30
3.1 言語 A と言語 B の特徴	30
3.2 言語 A と言語 B が存在する理由	30
3.3 言語 A と言語 B 中の c と o の頻度の違い	32
3.4 クラスタ分析	32
3.5 s_9 の割合	33
第四章：ラベルテキスト	36
4.1 ラベルテキストの性質	36
4.2 十二宮のラベル	37
第五章：ジョン・ディー	38

目次

5.1	ジョン・ディーという人物	38
5.2	ディー、エノク語、そしてヴォイニッチ手稿	39
5.3	ディーはヴォイニッチ手稿の著者であり得るか	40
5.4	ソイガ書	41
5.5	ダンスタン書	43
第六章	制作年代	47
6.1	C14年代測定	47
6.2	インクの化学分析	49
6.3	その他の年代の特徴	50
6.4	ヒューマニスト体	50
第七章	制作場所・制作者	51
7.1	西ヨーロッパのどこか	51
7.2	北イタリア説	51
7.3	吸血鬼エリーザベト	52
7.4	トレビゾンドのジョージ	52
7.5	ピンゲンのヒルデガルド	54
第八章	書かれた言語	56
8.1	でたらめ、暗号文、平文	56
8.2	人工言語	57
8.3	暗号の候補	57
8.4	でたらめ、ナンセンス	58
8.5	自動書記、異言（舌がかり）	58
8.6	古代バスク、エストニア、ピクト語	59
8.7	東ヨーロッパ起源	60
8.8	中国語仮説	60
8.9	フィリピン語などのマレー・ポリネシア語系	61
8.10	ヨーロッパ言語	61
8.11	ラテン語、イタリア語、フランス語	62
8.12	中世フランス語	62
8.13	古ゲール語	63
8.14	解読に成功した未解読言語の例	64
8.15	EKT 仮説	65
8.16	dain daiin 仮説	67
第九章	解読者	69
9.1	レオ・レヴィトフ	69
9.2	ジョン・ストイコ	69

目次

第十章：研究者	74
10.1 アメリカの秘密諜報機関メンバー	74
10.2 プレスコット・クーリエ	75
10.3 フリードマン・コレクション	77
10.4 アントワーヌ・カサノヴァ	80
第十一章：カレンダー	84
11.1 全ての月が 30 日	84
11.2 十二宮の紋章	84
11.3 月の名前	88
11.4 天文セクション	89
第十二章：エントロピー	90
12.1 エントロピー概略	90
12.2 ヴォイニッチ手稿のエントロピー	90
12.3 日本語のエントロピー	93
12.4 エントロピーを指標として利用する場合の問題点	94
第十三章：Letter Serial Correlation	96
13.1 LSC テスト概略	96
13.2 なぜ文字列に相関関係があるのか	97
13.3 LSC とランダムテキストの種類	97
13.4 どうして LSC テストは有効なのか	98
13.5 LSC テスト：結論	101
13.6 スペクトル解析	102
第十四章：ヴォイニッチ手稿の植物	104
14.1 専門家の意見	104
14.2 同定された植物	104
第十五章：錬金術	110
第十六章：近年明らかになった歴史	113
16.1 ヴィラ・モンドラゴーネ	113
16.2 W. Voynich による手稿の発見	114
16.3 ピーテル・ベックス	114
16.4 アタナシウス・キルヒャー	116
16.5 Georgius Barschius	117
付録 I・年表	119
付録 II・用語集	121
あとがき	128